

青森生活4か月「貨幣」風

日本銀行青森支店長 勝浦 大達



—私は、NE450859P号の一万円紙幣です。ちかいうちに新しい図柄の紙幣が出るとか、キャッシュレスだとかの話題も聞きましたが、まだまだピンピン生きております。私は、東京日本橋のコンビニエンスストアのATMから引き出されて、ある人のお財布に入りました。その人は、中年の銀行員でした。その銀行員は、青森に住むこととなりましたが、出歩くのが好きで、県内のいろんなところに連れていかれました。種差海岸を歩いたり、宇曽利湖のほとりでたたずんだり、十和田湖を遊覧したり、それから弘前のお城にのぼったりもしました。斜陽館に行ったときは、どこか懐かしい気持ちになりました。ねぶた祭では、合図の号砲が鳴ってまもなく、れいのラッセラー、ラッセラーがはじまりましたけれども、私もその銀行員と跳ねて、お祭りの一部になったのです。—

太宰治は、「貨幣」という作品で、「百円紙幣」の視点から、持ち主との出来事などを語らせています。そこで、「貨幣」風に、7月に青森に着任した私の4か月間を描くとすると、字数と文才の制約もあり、書き出しはこんな感じです（ちなみに、一万円紙幣は、正式には「一万円券」ですが、ここでは「貨幣」に合わせています）。

広い県内は変化に富み、美しい。流れている時間や空気は、穏やかで包み込む優しさがあります。私は早速青森に魅せられています。歴代の日銀支店長が青森を愛してやまない理由は、これからの冬の厳しさを含めて様々な経験をすることで、より深く理解できるようになるのだと思います。

人口減少が続く中で、地方創生の取り組みが全国で進められています。日本中の各地域が、それぞれの魅力に磨きをかけ、積極的にアピールしています。青森も、厳しい競争環境の中で選ばれるために、独自の輝きを放つことが必要です。

こうした点は、これまでも県内で十分に議論され、認識されています。そう申しあげたうえで、今後の取り組みに、多少の参考になるかもしれないことを、マーケティングの泰斗であるフィリップ・コトラーが書いています。同氏は、アイデアを創出する際の一般的な技法として、「代用」、「逆転」、「結合」、「強調」、「除去」、「並び替え」があると紹介しています。例えば、「宅配しないピザ」という「逆転」の発想から冷凍ピザが、「いくら使ってもなくなる鉛筆」という「強調」の発想からシャープペンが着想されたといった具合です。こうした製品への適用を超えて、太宰治の「貨幣」も、人が紙幣を使うという発想を「並び替え」、使われる紙幣から人を見るというアイデアで書かれたとも言えそうだということを踏まえると、これらの技法は、もっと幅広い場面で独自の輝きを放つためのアイデア創出の糸口を提供してくれるかもしれません。

ところで、「貨幣」では、百円紙幣が、幸福を感じた場面について語っています。ささやかな御礼として使われた場面です。お金が、新しいアイデアや感謝の気持ちと「結合」して使われ、青森が輝きを増す一助となる。お金がそんな役割を担えるならば、金融の一翼を担う者として、大変嬉しく思います。